



又のねり今有りりりいんたき 又のねりふねの雲

うまうたせきまそのねんをほく 三島の仲山

アハカク之破の雲をねんし けりぬるまふ

ねんし之破の雲をふさぐ けりぬるまふ

強し心之破の雲をふさぐ けりぬるまふ

向はてまふりけり 五島の雲をねんし

雲洞之破の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

守し七島の雲をねんし けりぬるまふ

付心

中野

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

高松

後鳥羽院

あやうと新のういあをきり今平橋の社也娘三三 判位

子首 三ノ丸にあり橋の社の名も也て来り新の幸月 判位

工夜日記に云くをきり河原の而もをきり河原の判位

社りて云くをきり河原の判位

はりて云くをきり河原の判位

結の町々ん民屋やあまり

○三輪社

山後郡 一梅わたり

景物 云語 木の葉

結補功在社新集又武宿のりてはわが社郡より

ちのす社の社

ゆ候とするもの名か凡そ高星のまの今をわが社

○稲葉社

石川郡 稲葉村

景物

石川郡 山山を真列

石川郡 山山を真列

まづれ稲葉山の甲のまづれ稲葉山の甲のまづれ

よりうめ侍とてあておきまづれ稲葉山の甲のまづれ

さてゆわありこれらのまづれ稲葉山の甲のまづれ

のまづれ稲葉山の甲のまづれ稲葉山の甲のまづれ

ちのまづれ稲葉山の甲のまづれ稲葉山の甲のまづれ

○子安社 八雲のまづれ稲葉山の甲のまづれ稲葉山の甲のまづれ

但産婦とてそのの社をわが社

け堂に訪ふ山陰にぬれり中々舟の流ぬるも
のりありしうねり山吹のきぬり又のりし程
日影とまほりくさくさぬわぬぬ程日かゆ
さいとやういふなり

○金剛院

武彦即園のまゆ金剛院におしそき
左のち壘ヶれはるあり

園こそくくくま藤白とほ下

此庭冊宗義のり年々書れりう今金剛院
はるしとやう

○乙津寺

原之即後山村あり

宗義

○慈深寺

在安八郡北村吾位持志書云とやりの
傍にけ子衣とて向きふりる阿土所門光雄は若
侍養うて侍りたり

是く遊りてはるは其のそよの枝とゆかり

○墨俣之辻堂

在安八郡墨俣渡郷に佛堂ありと云ふ

之はたゞけきと申すなり此は元々のこころに在りしと
は墨俣川の傍に杉のたもとにほたるの傍あり
中川よりけりけりたもとにほたるの傍あり
杉のたもとにほたるの傍あり
中川よりけりけりたもとにほたるの傍あり

杉のたもとにほたるの傍あり

此内はあつと何ていふは

川よりけりけりたもとにほたるの傍あり

字新ては氏より愛をききと云ふ

字新ては氏より愛をききと云ふ

字新ては氏より愛をききと云ふ

ふりかへては所念といふことばをひくゆりては
世に世にまゝしてはしるものいふその
持是院は古ゆ枝

さうなるといふやうな事だのり
いとふ事だのり
孝娘

わがの備やけの藤をまもたはしぬ
うらまはしぬ
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

あうて二月三日月より
あうて二月三日月より

かこよ東を命しつゆい
難江第実出はハ元侍をそのの無とておぼわつて云々の
原もせ祥しなゆり物子てそも彦流ハ侍しとすこ
云り又彦流とておと云の二位とて二位ハ彦流との又
お兼河しつ四葉よの村をなほそ住位せりゆかおせ
とて侍りぬすきさう之う及つ位の御おてわりて侍
侍りお兼お介侍候しつ侍候より侍りてきり角お
るとて侍りぬるの侍候に云ふ所のよとてお細とてお兼
侍の彦流とて侍りぬり物新と流る文流り中かのお
室とてお兼侍りて所の柳屋山空柳のの御と彦流の
自決の儀あり

うつてお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
とてお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

けお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
けお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

柳とてお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
お兼とてお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

又よとてお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
けお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
けお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

石段の更張御 候山 雲霧御侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
石段の更張御 候山 雲霧御侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

ほお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼
ほお兼侍りぬるそのうとてお兼とて浦とてお兼

影をい
まのまけしうりこそあまのりわたりぬし 四人

新株を築き置てん

山々のまのほのほのこころあつたまを 四

ほろほろまなま枝のあや

あまほきこぬのさ萩のこころあま 一人

ちののこころま

ちののこころのあま 全

日のお

移わにひりのまのさ萩 四

旧株目をとめ

株者の入りのま 四

新々新株 両上月を

山の理のま 四

新株遠く集まのあ

四

こまや 四

新株を築き置てん

神のこ 四

新後新株を

ま 四

新株を築き置てん

新 四

新株を築き置てん

り 四

新々新株

る 四

旧株を

ほ 四

新株を

ま 四

あはれなきと測とるりともよからずと注す
行の條に

目

息をこぼしけりや海はくさるる波は物かへしや

新抄集卷五の二

目

雲はまじりてそののつきの水かや濁るる

目

魚のつとてのるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五の二

目

くは文はつとてのるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

目

人りのささりしとてのるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

目

して世のろくさるるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

目

張ふの心はくさるるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

ほねはけりも早の若きより折らうつとてのるな

新抄集卷五

目

うさるる ぬくさるる 山の波のつとてのるな

新抄集卷五

目

おひのちのつとてのるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

目

是とのありありとてのるなと物すも折るはくさるる

目

けつりたを編のつとてのるなと物すも折るはくさるる

新抄集卷五

目

まの山を木の若きより折らうつとてのるな

新抄集卷五

目

まの山を木の若きより折らうつとてのるな

目

目

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

東下野守氏村新仕務を以て部公 四

部公のむらむらもその一そそのしそそのむらむら

新仕務を以て部公のむらむらもその一そそのしそそのむらむら

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

いふとすまふと

いふとすまふとその中をとりしつゝのいふのちりい

日本七道東山美濃國古蹟考卷之十九

尾刈真清田一宮莊武郡次輔平朝臣清圓編輯

和哥部凡證字可被景物以古哥一首

○稻葉山在厚見郡歧阜東南名奇因幡國與美濃兩國

皆控入景物嶺松篁郭么 早苗月 掛衣

紅葉 雲 嵐

古今和歌集離別の分 歌とて

之別也 稻葉の山のつらさ ねとてはハチヤク

宗祇方角鈔 諸國行脚也 追代或説二記中疑しき處あり

亦類 宗祇餘通 書切半圓按 群書之内可疑者 牧等六何書

非三宗祇詳 在景 宿國 見同 相違 何アキヤク 危之 此書

此歌入書四一歌枕 此歌因幡四當國先達兩説也不違

牧等契仲云文徳穿録云有衛二年 春正月壬午朔兩午

日從四位下在原朝行平為因幡守六字 堂宗忠 稻葉

集發名大曰此山美濃与因幡兩説不違 等之 然下勅撰名

跡述るる

と云はばまき山はたつし跡の成の表しつとまけの偏為り
母とておぼわると云はれ跡の母山と云つたまけと云ふ

○熊子山 一つは記程の野をこ 主物 時鳥

○電山 鳥羽郡電打つり 主物 煙 ねま

○ま遠山 鳥羽郡出たの鳥跡と云ふなり

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

は山沢のまのまは。さうと云ふしよまをまのま

又こ人三つりは跡と云ふ所のま

まはゆりつこつと云ふまは山の名のま

○虎溪山 鳥羽郡のゆき山と云ふや 摩訶盧山と

鴨也ゆきと云ふ列虎溪と云ふ川なりゆりゆりゆき

のままゆりゆりゆりゆり

まのまゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まのまゆりゆりゆりゆりゆりゆり

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

○^{まか} 鳥羽郡 正吉 鴨也酒

卯子 景物 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

千載 山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

○藤川 景物 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

山 花 春風 赤の如 節公 紫月 霜 網 杖

その極と知りいざなれば、その好より、ゆゑに、その好を、その好
作らぬ、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○伊予 伊予の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

○田代 田代の好、その好より、ゆゑに、その好を、その好

松まつ

松をよむ女也中の少也 松をよむは松の木の母

○多摩野 摩の山と多摩野とある所の山也 多摩野は
多摩川の流を信じて多摩より多摩川と名づくる也 多摩川
又其流は心と多摩と云ふも亦や 多摩川の流を信じて

○多摩野 多摩字、古田入 多摩野一多摩の字

○多摩野 多摩字、古田入 多摩野一多摩の字

多摩川流の井も多摩川と云ふも亦や 多摩川の流を信じて

多摩川の流を信じて多摩川と云ふも亦や 多摩川の流を信じて

多摩川の流を信じて

多摩川の流を信じて多摩川と云ふも亦や

○開系 多摩川、南に入る松野と云ふ也

景物 多摩

竹たけの山 多摩の山と云ふも亦や 竹の山と云ふも亦や

○青墓里 摩野原と云ふも亦や 少松野と云ふも亦や

多摩川の流を信じて 景物 松 若 古田

多摩川の流を信じて 景物 松 若 古田

多摩川の流を信じて 景物 松 若 古田

多摩川の流を信じて 景物 松 若 古田

多摩川の流を信じて 景物 松 若 古田

○若坂里 多摩川と云ふも亦や 多摩川と云ふも亦や

景物 多摩川 多摩川 多摩川 多摩川

多摩川の流を信じて 景物 多摩川 多摩川 多摩川

多摩川の流を信じて 景物 多摩川 多摩川 多摩川

あは

手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり
壺井の注ぎ 壺井の注ぎ

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

○手洗の穴は流の中迄之より下まで此の井の注ぎの例なり

○壺井水 壺井より壺井ありたを壺井の例なり

お子のゆりしおぬれそのよりのこころを切らんこころを
今小橋の坊主水落橋字橋下とてお水落出
ゆりのゆりしおぬれそのよりのこころを切らんこころを
けけのゆりしおぬれそのよりのこころを切らんこころを
こころを切らんこころを切らんこころを切らん

おとを合をす人のさしゆいひりへ夕を巧てよ見
こころを切らんこころを切らんこころを切らん
ゆりのゆりしおぬれそのよりのこころを切らん
の記さるるるるるるるるるるるるるるるるる
○夕寢文のそわそわをわらわらとてさるるるるる
でぬれをさるるるるるるるるるるるるるるるる
群のゆりしおぬれそのよりのこころを切らん
とてさるるるるるるるるるるるるるるるるる
ゆりしおぬれそのよりのこころを切らん

字水落のりたゆりしおぬれそのよりのこころを切らん
ゆりしおぬれそのよりのこころを切らん
このゆりしおぬれそのよりのこころを切らん

事見テ古城主平常友依野列之詠而改其名於白雲
水矣餘波流千載遺塵穴古今者亘哉城主美信平
亦副甲詞

寛文十三年仲春上旬日
右の洞の系考詠茶とてこころを切らん
持進友弘資

為年寛保壬戌春古城主兵部少輔金森主上朝臣碑石
建林信實ノ筆と銘法サカ鳥丸光榮師ノ序と云
是はむおぬれそのよりのこころを切らん
とてさるるるるるるるるるるるるるるるるる
おぬれそのよりのこころを切らん

高野を去るや神臺邊に依りて坐す神和名の
道とてそのまゝのまゝかたがたは坐す所の依り方
もよほしく依りたりて依の永く坐す依りて坐す所の
おに坐す所の坐す知造して坐すたりて坐す所の坐す
首とて切りたりて坐す依りて坐す所の坐す
たまたまく坐すたりて坐す依りて坐す所の坐す
坐す所の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す
坐す所の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

高野大御言 誠季

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

鳥丸 從二位 芝草

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

從二位 資光

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

坂城 從二位 俊將

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

鳥井 從二位 雅香

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

柳原 中納言 光綱

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

廣橋 中納言 兼胤

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

外山 從三位 友和

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

風早 正二位 實積

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

青山 正三位 重盛

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

冷泉 從三位 高村

高野の坐す依りて坐す依りて坐す所の坐す

中院左近衛中将通政

歳々も増進の心を以てやう々象の水とゆくの

園左中将墨賢

何れもまた歳々代草より始ぬ象の水の信を以て

山平左近衛中将英親

世もくぬ象の水を信するの信を以てやう々切つて

烏丸右中辨清胤

何れもまた歳々代草より始ぬ象の水の信を以て

長良少将資親

心もくぬ象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従信祝

心もくぬ象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平甲斐守侍従士古堂

心もくぬ象の水を信するの信を以てやう々切つて

長良少将資親侍従長春

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

象の水を信するの信を以てやう々切つて

松平信守侍従

幸ありとありのこのくすくすの川を流してはるるのくすくすの川
松平駿河守信望

竹垣てこのくすくすの川を流してはるるのくすくすの川
井上遠江守正教

流るの川を流してはるるのくすくすの川を流してはるるの川
童道

以上 銘詩者在又詩之巻

○養老瀧 多藝郡多藝山有

景物 田跡河 多藝野 芥 大伴東人

了業 從古人之言東流老人之若藪水曾名尔貞瀧之瀧

日 阿蘇川 瀧字は美音是古宮仁 多藝野 之上平 松平

松平 松平はの心と松平は上と云ふ也 瀧は流を物と云ふ

松平はの心と松平は上と云ふ也 瀧は流を物と云ふ

山脈のさそひといふと云ふなりと云ふなり 山脈

と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり 山脈

石川

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

石川の記 石川の記

一 細文まじり多し使えし井上ありきゆへ井上は細文を
定めきりて西をいふまに取らりし身は細文より書
毒色のまじり多しなり

細文まじり多し使えし井上ありきゆへ井上は細文を
定めきりて西をいふまに取らりし身は細文より書
毒色のまじり多しなり

註之

一

細文まじり多し使えし井上ありきゆへ井上は細文を
定めきりて西をいふまに取らりし身は細文より書
毒色のまじり多しなり

仲を乞ふ

親

甚平

井上とく言ふ親

一野狐孫位より書通ぬるまでとて増言の辨えの
正御孫と申すは孔の著りし中と申す事也
予の居るより久しきけり書通のさへりて
人のめり知りし事なき事也

一御文より上系りし事也予の居るより久しき事也
若し御孫

程の慈航を為す事也
五節の如く大なる事也表上

親御孫の一考を乞ふ
此の事也予の居るより久しき事也

先の御孫位より書通ぬるまでとて増言の辨えの
正御孫と申すは孔の著りし中と申す事也
予の居るより久しきけり書通のさへりて
人のめり知りし事なき事也

一御文より上系りし事也予の居るより久しき事也
若し御孫
五節の如く大なる事也表上
親御孫の一考を乞ふ
此の事也予の居るより久しき事也

して井上より一書を乞はせ給はる。依るに云龍
筆馬場より戸田内蔵元信之賢

一日佐玄龍與阿牙橋洞游於戸田光賢亭主人諾于客云濃
刈席田郡春近村者我采邑也有邑長井上氏者足自享兩
寅年井上與三波島家有奇愛不可枚舉也野干相朋友善或
時欲行于他告別於井上氏井上氏亦愛其情而肴物餞於
狐穴前

錢者餞也贈之酒並餞也

楚于謝之以書其書有老賢之家坐客相共見之筆勢文語不
異于人或引經文而賞云見此文則不可謂狐疑者乎老賢欲
錄其事使佐玄龍筆焉予在坐應其責而誌其後而已

于時

元禄三年庚午之秋九月穀旦

以之の記文之由公加如の條とある處の亦さる左の付録并
と云ふ所の井上と云ふは常陸のありの如くはと記し給はる

ト云自差かとも字々其の戲法を予予供の亦居加下
氏の家より婚嫁する内中へ通ふ有る付録并采面
許也さる依加下氏て之をけりて振の好事も同付
以希便家仕を控也旧後を叫かつて後書を再さる
乃て予此附寄圓の記を輯書するに由て附録を
とるぬ如く其虚云とありては揚ぐり不たぬ也

附考

一云此加如の取捨しむ平丹列の亦さる其家名を又と云ふ
あり二名をともありありしむを予予平書と云ふ
を併行して一にせり其世に丹列亦の形代り也吃
そとをさるさる如の事は加へて予一と云ふ亦併
しむて大智角して不皆一夕の事と云ふに在録せり予
知りしは是より毎夜居部して破壁即屋中月夜を
上座すなまハ血氣の男と武意を備へて破壁即
てさる防けと一と云ふ静と云ふり予予事予記の中

任必

自殺生石下滴水給朝夕炊水之用僧多則水漏了彌多也
寺僧憶說開祖之法驗也富院三石錄記一軸了於那須野將
野狐之類也上總三浦两个名亦存之錯紳家之筆跡也
予任爾認之實存未心之一說走喜石之非野狐之靈本草
細目云砒石一名信石生者名砒黃鍊者名砒霜出信別大
者色如鴛子黃明徹不雜者佳色燒霜時人在上風中餘大
外立下風所近草木皆先之和飯毒鼠死鼠猶大食之亦亦牽須
野殺生石紀列高野山玉川皆此類上有毒石灌此水在下流
者當觸之成蒙害

日本七道東山美濃國古蹟考卷之二十終

日本七道東山美濃國古蹟考卷之二十一

尾別真清田一宮莊前式部少輔平朝臣清圓編輯

怪異部二

于黃記云蓋是精之依物成者也物亂於中變於外也是形神氣
表裏之用也本於五行通五事雖消息昇降化動萬端然其存
存之微皆不得城而論

予按天地間非常者皆怪也儒宗傳云窮堯之談不足取耳
予憶儒者歸道于五倫天地之間謂感文應耳故一切不論
怪然佛言皆怪也并怪而難說法神詔靈怪畧相似撰志者
誰以已意網漏所有或讀老以詞而勿害意矣故當篇
禽獸蟲魚草木之變亦合舉之而已

席田郡妖巫

文德實錄云席田有姓巫一種滿蔓民被毒害古來長史懷恐
怖不敢入其部高房單騎入其部捕其類一時酷罰

風俗通之九九位通有唐店山有神爰巫共取公姬歲昂男不得娶女不得後嫁百姓苦太守宥到宮云云均云衆巫與神合契知其旨欲幸取小民不相當於是勅條巫家男女以備公姬巫叩頭服罪乃殺之是後遂絕沈氏筆談云元人小說誌巫人妖術迷惑百姓者今亦汎汎滿歧又按漢武帝惑於鬼神尤信越巫董仲舒數以為言帝欲聽其術令詛仲舒仲舒朝服席面誦詠經論如常巫者不能傷言忽蹶而死又唐太宗之時胡僧能咒人立死後咒即大史令博奕曰是邪術也邪不勝于正誠使咒吾心不能果如其言千金方云莫帝難忌咒云見怪不怪其怪自懷

安八郡水神怪

文德天皇實錄曰藤高房持美濃介安八郡有波室隈防缺壞不得過水逆之者先故前介國司廢而不脩高房云苟利於戾死而不恨遂驅民築隈民至今稱之

此地今在池田郡廣瀨庄号耶舍池田郡與安八接壤繩古者安八郡古守高房並安八丈夫條下所誌可志按

蛇穴村毒蛇

尾張風土記殘篇云山之地有池柱方一里昔日蛇之所栖也日本武尊殺之其國今猶号蛇穴雨雪之日為劇爭今猶若若土人号神所不得登此嶺上

圖按釋曰本記數引證尾張風土記焉蓋古書三卷字今号殘

篇者石上有餘蛇也終加大永弘元龜等與書篇中境地粗語多而可非所举釋紀之者乎在洛探書肆類本五六品借而閱之皆大同中異偽難決也世以為杜撰然今觀土人同之有當國中島郡蛇穴村與北野村接壤邑東北有一池周而大抵可一里湖底難量俗呼曰蛇池土人所怪語合之此地古入尾列且大瀨名亦本大碓命名未是日本武之兄也然則日本武尊求此地而斬惡蛇之事亦非無故風土記所載何謾廢介耶

麻我勢池怪

在各務郡各務村此池三方圍山周巾數十町恒各水滴下池中輻輳淵深不知量昔邑有長繩何異者乘馬直達池上龍蛇引而入水底歷數日歸于家々人看而驚異也手携一刃來馬不返其太刀傳而在長繩子孫之家邑有長繩氏族近代喜右衛門者其嫡孫乎又鶴沼宿文安寺同山圓應和尚欲棄法蹟於斯此池之龍蛇化來受法一山无水和尚乞水即自禪石之側令涌出水又文安寺條下記之

夕部池龍燈

在方縣郡曾我耶村邑西池亘十餘步水自北南流者時池一夜漲也五人呼夕部池_{夕部池}淵底幾數尋乃龍王宮融徹元文此溝漏出之地此水中泥土濛降亭三里餘中島郡堀洋村內止留_作一島傳呼_夕曰曾我耶島別二十餘反之地為租此池自古往々示怪異柴原村圓鏡寺緣起談實喜年中自池中出大鰲若經駁馬贈圓鏡寺今為什器傳府庫事別卷載_夕近代池瘦水也河北有津

燈

神社而神名帳三載之例正月十四日池面點圓火出物俗號龍蓋自龍王宮獻津神社之神燈也故此夜近隣民家老若男女十_夕池邊三會同_夕看者如指具言語謔譁時輿遠浮更離池水登出火大鞠_夕如其數隨年多寡_夕耳區親敬看之則移在他處近無度又无常所至曉不知終處此外富國之內虎溪山龍浮淵多良正山內云此奇火有_夕語傳之未看止證

予按凡日本世俗呼龍燈者温故日本紀景行卷筑紫火_夕記和歌三詠多_夕今考肥後國八海中_夕現者是也蓋神代以降

奇火_夕尤可怪也曾往年土人聞也八代自山顯眺望之海中隔二三里海底生一火長_夕加曳繩及寅時許分飛如星流須

史妻化團丸之火來止八代邑安國寺中觀音廟前松梢徹曉沒所在人呼稱龍燈松到于今月末九日臨日在此事怪異

著者也又丹後國子佐郡成合莊天橋立海中_夕出龍火為佛燈世俗之口所誦昭々乎_夕上代創伊弉諾伊弉冊尊此浮橋

之_夕上而國家_夕創業_夕賜事風土記文叙日本記引證之文詳三

備凡最神國靈塲里其瑞者乎今一所筑前國三井郡高良村
社點物是也凡此三所者古往今來傳人證古書誌赫々々
其他諸回傳聞者豐後國一說羅漢寺或國東福島里岩座
赤里空菩薩龍燈者大晦日夜自大隅川里出龍燈淵岩龍火出離
方・淵上岩上視者驚祠同人安藤家家臣加茂下氏予外之因緣
了去卯秋懷奉公命從主移輿別築城郡平城下通書信曰城
北三十箇町有赤井嶽高山靈地也自麓踏嶮巖攀上十八
町有某師堂東南海隔一二里浮波上里未靈燈每夜懸佛
前之松朶故別不浪常燈殊月迫北九日晦日照圍夜數燈了
火大如鞠大徹曉沒所在在地者跳出也和漢龍燈說
不聽發明之論盡神代卷云周麗周御津羽闇暗也陰闇謂水
一云龍火水中火稱也陰中陽夢溪筆談云以慈心設理
夫水火相薄擊則雷鳴霆是也高談論虹亦此意凡異郡書水火
物理論者々々々十七七華龍燈之名作論者予未詳之
耶邪池怪

在池田郡廣瀨莊傳云安八郡主詔安八大夫也家富有女子太
夫殊鍾愛之此池龍蛇之婚逆女蓋廣瀨池靈蛇者山王神所化云
今四月中厭日神戶邑山王祭日同郡安次村農家高橋傳右衛
門右者曰安八大夫孫裔例古此祭前驅々若傳右衛門不與祭
事則有弄祟而不能終祭事今以然云蓋安八子池田古同郡又
安次者安八郡主也此地住安八大夫安次云以實名云為邑
名者又夏日早戀之時女子之頭莊飾具以七邑靈臺灣池面
忽水也卷淵底沉兩滂沱降今以雨云雨云委山王神條下誌者亦
可合按

按耶耶代醉編云李冰為濁郡太守江神歲取童女二人為婢
冰以人子江神為婚不可也至神祠責之云云遂死後蜀人生
子名冰兒

神路村裂石

在郡上郡神路村天文十九年雷雨霹靂山門動鳴晝暗如夜于
時邑溪河中降一巨石乍破裂云作二石今存者俗呼謂神路村

割裂石

梅尾張風土記殘編云尾列玉置山有一石星之所落也麓有星池星之常所宿也亦有怪石星之所化也今其地不詳○又梅在地為石在天星星降為石石迴山骨也從天動星隨雷鳴霹靂震動是也星降非怪異而以非常謂之則又可為性

石鏃

各務郡石務奈或北山之山追農民穿地往々得異物非石非鐵其形如矢根土俗云上古神軍之時所用之鏃根也又出羽神宮引出者雷斧尾三代實錄三詔光孝天皇仁和元年六月廿一日出羽國秋田城中及飽海郡神宮西濱降石鏃梅奧列鳥嶋鹿島佐渡邊今有拾取之俗謂天狗之鏃長三四寸紫黑色非石非鏃尤非刀削獨奇物也 推本草綱目

孝齊靈礎物此物伺候震處掘地三尺得之其形非一有似斧刀者判刀者有安二孔者一云出雷列並可東山澤同因雷震後得者多似斧也青黑班文至硬如玉又雷書云雷斧如斧銅鐵

為之雷礎似礎乃名也紫黑色和漢此類者許々皆奇物也

一三代實錄元慶八年九月廿九日丙戌出羽四司言今年六月

廿六日秋田城雷雨晦冥而石鏃二十三枚七月二日飽波郡海濱雨石似鏃其鋒皆向南臨陽寮占云彼國之憂應在兵賊疫疫對六

一同仁和元年十一月廿一日辛丑傳云去六月廿一日出初回

秋田城中及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃阳陰寮言當有凶秋陰謀兵亂之事神祇官言彼國飽海郡大物忌神月山ノ神田郡田豆佐乃賣神侵成此怪崇在不敬

彼回土人物語而石鏃之怪今以時々者此事得志見エタリ

尾張風土記殘編云尾列玉置山有一石星之所落也麓有星池星之常所宿也亦有怪石星之所化也 其地不詳

黑坊主

或書云飛驒美濃埜深山谷之間此山鬼アリ其形體如猿長毛真黑能立面行又人言然不害人山人知予不怖若人欲害之則

先知而逃去此非人非鬼怪異之物呼謂黑坊主當回東北之堺
東者信州從平以北國巾西飛列加賀越地境繩山谷澤切峯
重疊之人煙所絕長不知人蹟寔幽澤之地這山中陰氣積集本
容影侵山標山郡山鬼野遊梯々黑背茶異類之獸化生為此名
為此怪和漢同一例歟

述異記云南康有神曰山都形如人長二丈有餘黑也赤目黃
髮深山之因作窠居今昔物語誌友系信通記列東西
又云死人之名亦許羅或ハ物ヲ呪フヨリ又ハ人高トシテ
糸ヲ打テテヨリノ事彈ノハ又ハテテ死人トシテ切ラシ又
陸奥心内乃巨跡ノ大人ノ死骸アリ傍ノ死ニ世々傳フ大人
スレハトモモ死ニシテ切ラシクモ死所多クアリトモモ

大平法師

石津郡大清水院村近き大平法師足蹟トテ足蹟アリ里人戲舞
此法師近江湖水一跨ニ跨踰タリ去又谷汲觀音堂藤ノ池道ニ
尺許石人踏有足蹟而分曉者之

圓云凡此二糸佛奇特ハ予カ論ニ不暨和漢亦在此例欽金
臺記聞云平陽奇怪馬驛漕河兩岸瓦土上婦人午跡或臺或
跡儼然若卯又瀛涯勝覽云王都天姥有足跡深二尺長餘八
尺又五雜俎秦始皇廿六年有人長五尺見於臨洮乃作全人
十二又平帝元始元年六月長安有女子生兒兩頭面俱相向
四臂與胸俱前向尻上有目長二寸 同靈帝中平元年六
月壬申雒陽男劉倉居西門外壽生男兩頭其身至建安中女
子生男亦兩頭共身

念佛池

此池隔大野郡谷汲十餘町西南在西國煩札往來道側池亘三
回許渡板橋通往來傳云當橋者高倉宮所渡處也云旅人立此
橋上唱六字名号則水面佛々唱如應之人呼号念佛池

按二撰列有馬温湯記有妬湯羅山翁幸此類題詠又和漢三才
圖會毛亦同舉此類名五雜俎論之云物作人言於文海披沙中
詳載之揚列蘇德夜卧聞數人念阿房宮賦声之而小也視

之風也其大如豆逆殺之唐天宝同當塗之民劉成季暉以巨
觴載魚有大魚呼阿多佛俄而方魚俱呼其声動地以救氏見
之則佛靈驗也以物理着之則陰陽轉動許多此妄也

金段神靈

多藝郡稱古地西接金段村邑有產神稱八劍宮旅人乘馬過社
前落馬紀貫之蟻通神美同由緒未考

飯木邑神靈

同郡飯木村隣金段同有產神登神不詳云老傳云此神前蹶倒
者其所着衣片袖葉而擇神贈之不然則乃得神掌不知神故也

白熊

江源武鑑云天文十八己酉年九月十九日自立政寺獻白熊於
將軍大如小馬頭係金札誌云美久元年正月十日土岐太郎老
秀捕之同月廿五日放山即從將軍家上朝發去後飯將軍因放岩
倉山云云

按天文者後奈良帝康久元者順德帝崇仁三百四十一年事將

軍者足利義輝公土岐太郎老方姓名不見于家譜岩倉山在洛
北江源武鑑佑才氏之末族所據近代之書也同久有社探
之言一偏難用

風穴

惠那郡岩村東接川上村阿木山中有一穴亘二丈許底深不可
知恒吹出風鳴如雷常吹出風人以石投穴中則大吹出風十倍
近邑家宅穀物吹倒為良害故土人恒守衛誓之駿河國富士之
頂有風穴恒吹出風穴下者權現神處也近列醒并宿隣田知
多村山腹風出穴予知丈時土人謂石津郡多羅山中有窟穴
出風如之有此類歟

清子一穴

在多藝郡清子邑雷山巖老瀧北一高山慕風迅雨乘暗夜自岩
響之間如吼生一火東南飛行之勢列多度山遍逗留再還
本所又云南宮方飛來人呼謂清子狹火
按山生火是自然不怪駿河富士信濃淺間日向峰峯肥後

阿獲之山類其他山下火蒸出溫湯皆萃石暄然辨列多度神如稱一日蓮者別所致神靈欽仰亦怪異之事當山之火類之類可謂奇

谷汲油石

在大野郡谷汲村葦嚴寺昔延曆中帝坐下之石生油如泉後世漸減不見其餘滴也詳見寺院上葦嚴寺之條報書又抄彼予按日本天智七年記越前國獻可代油薪之水云云貝原氏云越後黑川村山麓有一淵水上浮厚者油也土人酌取之代用燈油長與矣公葦嚴寺產物雖似大異也被陸陽所化是仙之靈驗也此亦彼天地之間一奇事也

山石不

牟藝郡下有智村山路之間塚地三四尺土中有物非土非石甚堅牢也民家掘起者數日乾日為薪須之具火如與炭善保持又為民用尾列丹葉郡岩崎近邊亦有此物

貝原氏收獲踏又記近列栗田郡內塚地有益物土人傳云

竈郡上古有大栗郡名存之此物即其栗葉塚之地下遺者也恐俗說也天智紀代油薪乏水土者謂此物乎

日蠶葉

在土岐郡月吉御月吉日吉十二卿中一村日吉北月吉南之隔一小溝為境繩此邊山谷間村治有居民鮮少也山土堅牢如砥地掘穿有似小見物長一寸三分些有大小貝未卷之捏而大抵似螺貝形九捏者尤難得向日映徹土人呼號月蠶或云明月夜自天降端生降故名或人云九曲玉乎未考仔細又別有日蠶者形自是大也是從天非降從此非蠶生傳日言邑福壽寺什物也自古謂此里名月吉日吉皆入右有此奇物名狀○和漢三才圖會月吉日吉相傳每秋夜有降物長四五寸而稍屈曲形如螺貝色淡白俗呼日月蠶未知何物矣

按本草綱目月桂誌云今江東諸處每至四五月后晦多于衢路同得桂子大于狸豆破之牽香古者相傳是月中下也靈隱寺僧種得一株唐書云垂拱四年三月在月桂子降于台

輩亦貞如瘦瘠梅後來源家之孫有與則此根生根結實乃取殼
有梅實蓋埋地後此梅再生根結華實盛也若得植之則猶其
實辟蠹剗物即存泥村之內

美濃記云此梅在石津郡河戶村民家庭具實驗時自葉所指
剗肉實亦共割

楊枝柳

在石津郡小島村西塘傍其地別平柳茂云源氏柳氏云又顯柳
柳云昔源義經此地未取出懷中楊枝柳此地後生根生葉屢年
長榮然其具枝端逆生蓋其種類傳者皆然乎

扶梅

在厚見郡鏡島邑乙津寺堂前當寺弘法大師創建也空海未時
所携持之以杖穿之度上并其池地雨後生根枯花結實且花直
着木間不由枝視為奇字祇顯此梅有發句載別卷俗呼謂梅寺
或人同空海自携來樹已向九百年寔矣空海傳而于今元
祐先耶云梅譜右梅會替特多也去城二千里有卧梅相傳

唐時者也本朝駿列清見寺庭上有偃梅巨枝四丈餘不知年
在會稽之類欽又晉書大興四年王敦在武昌鈴下儀杖生花
如蓮花五六日而萎落此其性于實以為往花生枯木又宋
書五行志云永明四年巴列城西鼓樓旃栢柱數百年生花

杖柳

在同郡西庄立政寺庭上是亦同山知追策杖者衝立庭上正枝
葉理同乙津寺梅

葦竹

在不破郡益飯村道傍所生葦末生竹葉傳云牛若與列下向道
翹息此地詠和歌一首意道息所生之葦試當家之采裏具詞云

葦葉作竹昂如竹試歌斷野不足奉俗同謂葦平竹者亦粗似之

或人曰始慈竹在圓光寺村或云在石津郡飯村義朝為所

試植後好事者移此地為牛若之事實否未知何是又按日圖

牛若松傳牛若之所植也朝鮮人有題詠

銀老竹

生多藝郡瓊老山麓大可作杖節同一寸或二寸亦三寸先規節同肥瘦形異形他取來移植亦茂生人呼曰布吳竹是竹異物者乎

德永法印鷄

天正年中德永法印奉秀言命巡諸回水田陸田入掉定町反畝數是俗謂檢地德永不破郡五宿奉時農家某者捕伊方山鷄二頭贈慰房法印受感其志酬報之以水田三十二町子孫于今傳頌之今春照邊邊鷄皆由異他是亦一異物

連理木白鷹

續日本記元明帝和銅三年三月戊子美濃回獻并連理白鷹

靈鷲 家名鷲又鴨舒鳥家鳥鷲鷄 同年

東鑑七卷云文治三年十二月七日甲戌梶原平藏景貳獻靈鷲背与腹白似雪自美濃回出來又云景貳者彼回守護也

鳥羽白規

方縣郡高木村鳥羽村山中有一小社宗白規權現不詳何神古

俗傳云昔自此山中獲白規子獻朝家故改其曆号謂白規又竄称其社号白規權現

圓按白規者日本紀才德帝大化五年二月庚午朔戊寅虎戸國長門國司草壁連醜經獻白規曰國造皆之同族贊正月九

日於麻山獲焉云云是即詳瑞也改大化五年為白規元年自是後得具等瑞則号宝龜号瓊老亦此例乎是僅憑長門國瑞非當國事後世好事之者附會設此說乎然白規權現之名古傳來非近世事又有故乎 鷲羽科名亦似出誌住後證 白山雷鳥

黃楊松

在厚見郡加納城南上下葦手回野路二三町程根株恒松与他 不異至其梢小植者十三四文條夏未結實者青熟後黑此類 數十株冰室亮長云是松寄生保滿檜榎桑榎皆此物了葉密小 異也生于茶山花者亦別也尾奇質崎山陵山檜山茶花者似之 予按西陽雜俎五歲松孔雀松如何者乎潛鶴觀書草木異觀多 誌未湯不考之

女の子をうけて抱くなりと云事見のまのうつくしくと云ひたり
まを武を懐てをせしとて神のうつろひをうけぬ始あひり
女進定つてふと云ひつとをま武りやむを命いしはより
こゝのまをうつくつてと云ひつぬめの子をとりてはとて
上の世をうつくつてふと云ひつぬめ

壬戌事別卷草綱目誌云秋右乳母身有誌名鬼鳥謹誌
釣星隱雅昔人曰此鳥產婦所化隱惡為妖故有諸名收人魂
餽言中記姑獲鳥鬼神類也衣毛為花鳥脫毛為女人脚
前有兩乳喜取人子為己子凡有小兒家不可夜露衣物此鳥
夜飛以血點之為誌也輒療驚痛及疳疾謂之元草疳也荆列
多有之亦謂之鬼馬周礼庭武以故月之乃故月之矢射矣鳥
昂此也又此鳥純雌元雄八月夜飛害人尤毒之予梅見以上
鳥類似也又桐河者封江隣載雜志云徐積於廬列河以得一
小兒年无指无血悞而埋之此白澤圖所謂封食之多方者也
長門前司

今昔物語云長門前司存花と云事見のまのうつくしくと云ひたり
町園白なるはけりしを使國守侍のの莊と初りあり、まを懐
紀を舟懐と云ふなりを花子のを補ふと云へ懐りのせやま
下の白をなまを懐りけりぬと云ひつてありりるは花子
ありてなまの懐を懐りぬと云ふの女補つてたりしを補
て何れぬありするをまを懐りぬと云ふは、まを補
りしを懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
うりぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
さとの懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
かひくとまを補ふと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
張と云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
「まを懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
を補り、再司の懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補
を懐りぬと云ふは、まを懐りぬと云ふは、まを補

在可兒郡^ノ泳里昔景行人皇在此地時脫皇衣懸於岩乾賜了衣
于岩其高三尺許今在民家之庭往々人稱瘡間有跡最不淨之
人恐怖不親岩景行帝有別卷

水晶石

在惠那郡岩邑城山是號水晶山藤井氏云產當山者不美也非
水晶又云同郡土岐郡時々村山中生石上物黑白有從白純黑
又交雜之物皆六角是蓋陰物以白為正色又各務郡伊養山西
南隨水邊有一水精石兩石上覆壓之障之者僅知其精老時珍
云水晶玻璃之類有黑白二色條目多水精筭一南水精白北水
精黑色乎梅曰本諸國所々山中產此物石上生如乳清白者為
上品往年扶病湯浴根有馬湯取遊報瀧瀧上有水晶山神即皇
后廟祠あり山靈雅摯遊遊匠三觸洪水降乎拾收一顆歸也蓋大小
長短與皆具異端天角あり日本以加列產為第一

磁石

在惠那郡苗木城近地飯地村此地曰始邑氏不知之石丈尺

餘持農貝往來又二銅鑄之類吸取取沒所在譬如需在于爰後人
僉知而堵隔路城主遠山氏ヨリ啓關東撥取之禁也即以石鐵
梅續曰本記元明帝和銅六年從近江回獻磁石道三條岩本
草二為伊吹山產蓋本之乎字暈石可引鐵本草山之陽產鐵
者陰必有磁石蓋二物同氣也或人云有德院殿御代自奧列
仙臺獻之寫二我友氷室氏小物傳苗木所惠我試焉釘針
之類吸取之

鏡石

在石佛村自雄總村指良方堯二元館町石長良川岸
高割而路住二尺許左岩石傳麓過大危嶽丈之上有此石此石
岩角輻輳登難攀路秋霧精黑石面不明僅照其面又可兒郡惟
子村岩鏡寺境內有鏡石山石本之乎諸國有鏡石名也浴北鷹
峯北誓峯下鏡石徑二丈許高半之乎如磁光真鏡俗傳昔源九
郎判官臨此谷刷其戎衣又同小僧山有因岩觸身於石視之其
清明試持銀子可拔鬚紀高野山自麓昇三十餘町花坂邊時鏡

石住大許四尺登山之者步寄子看之石面滑潤澤所々有赤色
 他如磨鏡伊勢鏡石玄葛石地不許町又石怪物鸛鶴石志摩國
 近邊坂東南御機殿邊茲卓岩大三四丈隔于側言諸之者聞之
 誠其言語分曉曾合又宮川下流五里有一瀨村斷同之又敲
 出響物並生石子者在吾庭牛又人肌石在錦倉僧島寒天亦溫
 也社陽雜篇唐大中比日才王子來朝出冷暖玉捍子冬溫夏冷
 也故謂之冷暖玉不由製度自然黑白分焉是人肌石類也又天
 巧其君子長列赤同開西北一里節之隨有天然君子五色之物如
 非人工紀列那智黑為碧石亦同之大和奈草詠與列磐大山有
 毒石禽獸觸之則死那須野殺生石類又謂異邦之名石水花石
 婆娑石目々石響石望夫山松風點頭石仇池石齧林石碕卵石
 魚藏石虎化石落星石三生石寶燕石康平石薩石芋化石兩維
 西南之美者有萃山之金石其他石諸杜陽雜編錄異記晁堯辨
 註異物志珍玩考云中記牙草等皆萃之

敘葦石

在惠那郡山田村山中可一里土石也行々鷹芋碎取一這裏
 如不葉紋形了一以為奇事出怪異奇

天狗岩

在土岐郡虎溪山永保寺川東出怪異奇

水牛石

同在所溪山東流水中獨木橋北邊其石形似牛乃臥蓋用山夢

想國師銘名者也

坐禪石

同在永保寺境內石高五六丈北張出庭中竦拳頂上平滑所恒
 禪坐終日山鳥來而上頭啄餌或馴親為異一一時作歌

石の山鳥坐して終日啄餌を馴親として異なり一時作歌

燒石

在多藝郡大塚村昌福寺庭中石高三尺許畧有人卓委土人喚
 之謂燒石昔招自菴正徹配流當邑題結石詠和歌事八有別菴
 清子庵磨石

在多藝郡清子村山腹石高臺又許周干跡之慈石邊乘風雨晴
夜出一團丸之火東南方之飛行也又歸初所運磨石不知其由
意一火事前誌

春澄石

在多藝郡木尾御賴原神社此之神昔春澄此河北白山上神山信念苦
行二千時神驗靈應有神移等今願厚山于時澄未此地隔
音光河吟順望靈靈形山今須原神山事八在神社之卷乃其時
掛石也

圓山石

在加茂郡伊深山膳敷町ヲリ圓山惠玄始德德在喜富邑賴農家
惣左衛門居名者惠玄坐群人呼稱此名詳事在寺院卷初使懸
衣宿

昇仙石

在可兒郡取組村子勝山村境陸田中跨卓于高四五丈蟠根三
百坪此菴欄行用者傍石西行人田驛二通者傍石南行始土人

續廣世四同

呼名曰踵石又菅山尺云手等平田内孤有此石而傳慈石義未
詳近代此地旧田氏引好事之反此地二未詳作而銘名曰昇仙
石其辭大畧云

加藤次座石

在惠那郡巖邑城下治兼比遠山莊二盜賊多也其邑人西尾氏憚
此賊難諸伴勢大神宮祈之即憑二靈夢得伊勢人加藤五景負男
次郎景康歸岩村後等當城于時景康此石跨踞望山二空宮當城
後邑人崇景康而祭社床木其事亦也事在別卷詳二合後卷

同屏風石

同在巖村城下理如前誌

迎向石

在大野郡谷汲山華巖寺藤池邊大三尺許傳云此地二乘レ時佛
是也其狀如人足見者奇之異邦此類多大平法師傳下辨之畢

膏石

同在華巖寺觀音菩薩座下延曆年中豐然欲具此堂于地得

一石瀟瀟詳見元亨釋書詳々當院條下、誌より

伊久羅神石

在大埜郡伊久羅川天神神地坐徑四尺橫徑三尺許土人傳語
倭姬命御膳掛石也倭倭姬世記注目入秀五十杖筑皇仁天皇
十年辛丑秋八月一日遷幸于美濃國伊久羅河宮四年春有自
是尾張中島宮三從五中島郡神部宮僅設柱四寸覆屋根俗呼
吹貫社相傳倭姬皇女負載天照大神此地東覽越息乎旧地
也其例二寸御船石了此類一取之典故乎近代改造為神明之
社

丈六塔墓石

在安八郡大垣西抗瀨川水鳥瞰河風土記秦河勝曾誓而十六
箇國建谷々幸御邊一墓作在此地者其旧跡云故名邑曰十六
堂村又傳云始此塔在抗瀨河水邊大水毀塔而八十年前移
今地礎石没水不準遣旧地高自若々子細詳石可考 塔高五
尺許覆上テアリ

夢想坐禪石

在牟藝郡大原加村老杉山大福寺境内皆夢想四師得尊氏之
貴寵在斥溪山永保禪寺養者也追隨者厭之讓永保寺於佛國
諸道隱栖山當山亦景色アリ今黃巖流也

長瀧禿石

在惠那郡長瀧寺境内内岩大九尺許周円由銘石詳

黒岩

在厚見郡推加納城北十町許全文明神西陸田間有二石橫亘
四尺許豎亘七八尺黒色半埋地半掘土人呼黒岩又傳此石不知
入地之量而未試之美濃雜記云昔仁明帝御宇中朝言行手卿
被勅命自陸奥國金華山挽来金華石ト其事編華社記是語、
華良公在藤河記蓋後人以此石所會彼金華石事者歟其他
皆不詳

神路裂岩

在郡上郡神路村遠藤但馬守度隆者六島左衛門盛數嫡男也

慶隆生天文十九年神路村木越之城申誕生時迅雨雷震動山河乍降一岩石於神路之河中此岩頃史破裂為二箇今呼裂岩者是也

圓梅春秋記題辭星之為言精也湯之榮也隔精為日日分為星故其子星為星又左傳云星隕為石夫星為物在天則赫然照大虛降地則化石土骸天地元自通氣時降亦皆非性慶隆之生也偶當于此時者乎慶隆事歷別卷三

赤坂山盆石

在不破郡赤坂驛山者宿北非高山同名之間有奇石居盆中可翫賞予一時得小石携來而登器青黑色班斲石肌滑潤色可下跨尺許上容似山有拳畧足可愛

鵜沼石

在各務郡鵜沼驛山中石色黑肌不滑所々有小穴或擊之穿小穴又不堅益濕水孔植草木茂暢不枯充皆生花結實蓋石腹受水氣培艱草根之故乎爾雅云西南美者葦山之金石玲瓏石石

燕本草二語又雲林石經二石名數等焉

貝石

所々在山中藤井氏云中古以來巖壁合貝煉作屏備矢砲之防禦圖貝石之地心城堙之遺趾ナリ或云活蕩之世海水凝而為山故貝石山申在丘誤非也

宗祇石

在郡上郡八幡城狎并入所家老屋數側縱橫三回許其地謂名木市店曰岩木町又曰宗祇者其居地櫻等在此地謂名賴

津南石

在石津郡翁嶽西多良西時川東遍由緒不詳

谷汲油石

元亨象書云秋豈然欲營勝藍安觀自在像追曆中相攸至美刈谷汲搆精舍當平巖一巖忽石中油出然生希有意誓曰於此地每大悲像若博利未世願此油益多言已滿如泉然大喜便安十一面觀音像自是聖感溢傳朝廷回其瑞應賜額華嚴寺後

具油新微今猶足殿前常燈云

予按日本天智七年之本紀越前國獻可代油薪之水云云

貝原氏云越後黑川村山麓有一淵水上浮潭者油也土人酌

取之代用燈油甚臭夫土產与佛驗雖似不曰天地之間亦一

奇事

賴政竹

土岐郡神篁村賴政産地三等此竹生也按地長事數十分為兩堂

延後可作箭三位作之箭射擊宸殿化鳥云其事三位條下誌

五雜俎卷之五 氏史城高巖寺後有竹竿出土分兩岐直上人從

來不見之種也

香賀岩

在厚見郡稻葦山麓長河水涯天正年中長篠之軍家康御受信

長公加勢大得勝利六月收軍來誼礼謝之時避暑氣於香賀岩

亭有饗應見軍記此地長良河清流絶塵而終日迎日之涼夜降

鶉飼艇來添夜色公在岐城時亭作為遊覽之地可從橫可三

文臨躑躅入水羊憑山停此岩名傳古者羊蓋夫木集三誌歌和歌
部アリ

古蹟考十五卷拾文政五年壬午夏十枚許寫之自七月初
至九月五日寫畢元本脫謬甚多矣往之可訂之也



